

## 「災害派遣を通して ～人とつながる～」

姫路市立白鷺小中学校  
主幹教諭 中玉利 展子

### 実践1 「被災地での絆」教育復興支援長期派遣

#### 1. 派遣の経緯と現地に入って

2011年5月、東日本大震災後から自分にできることを模索していた私は、兵庫県から宮城県へ教育復興支援長期派遣の募集を聞いて希望を出した。

派遣は、宮城県女川高等学校での養護教諭の加配として9か月間の勤務となった。現地に入り、被害の大きさに圧倒され、なかでも津波の被害で、大切な人が見つからないまま心置き場が定まらない方も多し。再建に向けての金銭面だけでなく様々な問題がある。何の役に立てるだろうか。生徒や職員に受け入れてもらえるだろうか。少しの不安と役に立ちたいという意気込みだった。



【震災翌日の女川高校正門前の景色】

#### (1) 学校の実態

##### ① 生徒の被害状況

震災当日は、入試採点日のため生徒の登校なし。当時の生徒169名で被害はなく全員無事。

家族が被害を受けた生徒は7名で、全校の79%が住居の被害を受けた。

##### ② 教職員の被害状況

震災当日は、教職員のみ出勤。教職員34名で犠牲者は1名。家族が被害を受けた職員は1名。住宅被害は、全半壊と流出が12名。

##### ③ 校舎の被害状況

校舎は、各階の壁にクロスが亀裂が入り、4階の教室の天井が崩落した。体育館は数か所が窓枠ごと外れ、被害が少なかった武道館が避難所になった。

#### (2) 取組（職務内容）

##### ① 生徒への対応

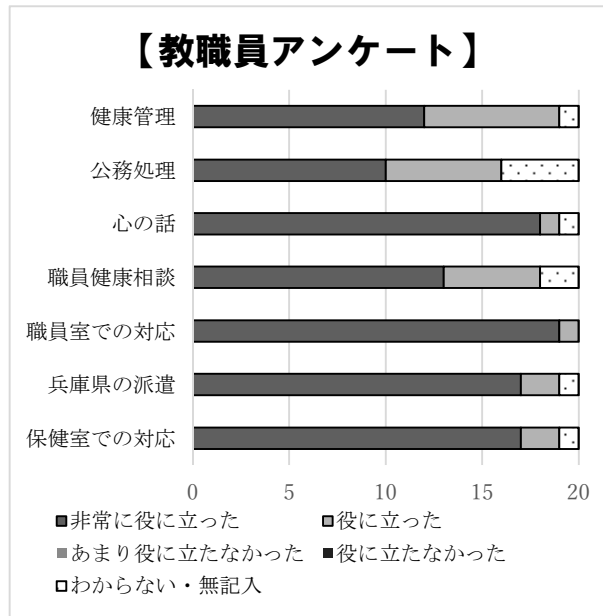
校長より養護教諭の補助としての仕事を依頼される。生徒の対応は、保健室または職員室入口に置かれた長机（通称名：止まり木）で行う。特に、職員室での生徒対応が頻繁なために生徒が落ち着くまでは、止まり木での対応が主だった。イライラして教室に入れない・勉強したくない・帰りたいなど心の不安定さを訴える生徒、荒々しい行動で訴えてくる生徒など、様々な生徒が職員室に先生を求めてやってくる。派遣に入った7月の初めは、1クラス10人を超える欠席だった。「学校に行く気にならない。」という言葉も聞いた。そのうちに、「関西人が来た。」と文化の違いに興味を持って近づいてくる生徒もいた。頭から震災の話をする生徒は、ほとんどいない。生徒との何気ない会話の中からポツリと震災の話が出てくる。気になる生徒は、担任へ連絡し、教育相談に繋げる。

2学期、3学期と日が経つにつれて被害の大きい生徒が話し出す。1月頃には、家族全員を亡くし、そして発見したという生徒が話し始めた。カウンセラーに繋げる際

には、一緒に来てほしいとの要望に応じて彼女の横に座りカウンセリングを見守った。

## ②教職員の様子

震災の前から県教委の計画で2年後に閉校が決まっていた。2011年度は、3学年が揃う最後の年になる。震災に家庭環境の把握や様々な奨学金の事務業務、様々な所からの支援の対応もあり、職員も疲れきっていた。年末に、テレビで震災の放送が流れているのが気になるが見ることができない。見ていると苦しくなる。など先生方の心にも大きなものが残ったままで勤務している。少しでもゆとりのひと時を持ってもらおうと休業中に関西を味わってもらう機会を作り、明石焼きなどを行った。

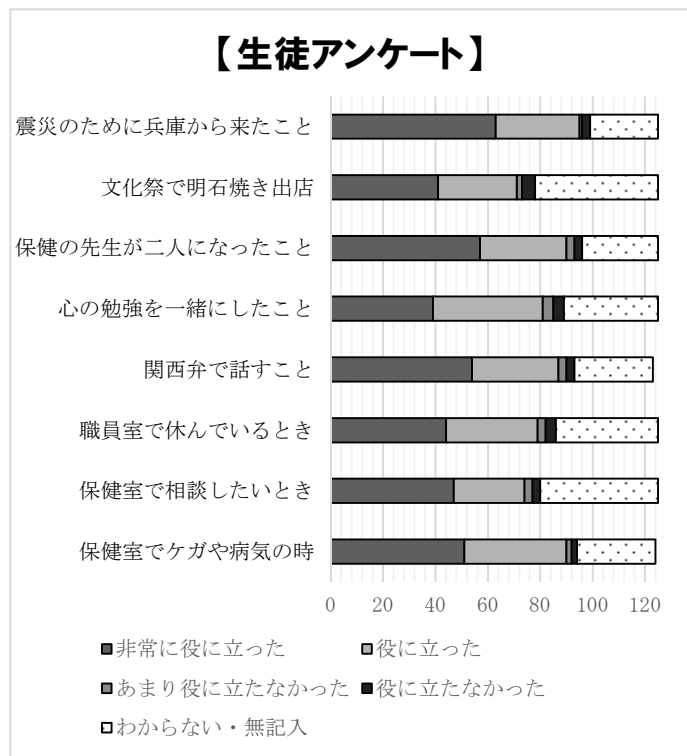


## 2. 成果と課題

派遣が終わる前に教職員(20人)と生徒(125人)にアンケートで評価をもらった。

教職員、生徒とも阪神・淡路大震災を教訓にしている兵庫県からの派遣の評価は高い。また、保健室の対応だけでなく職員室での生徒の困り感を整理していく役割も教職員の忙しきの軽減として役立ったと思われる。

生徒に関しては、養護教諭が複数配置になったことで安心感につながったと感じる。特に1年生は、震災時が中学卒業時期であり高校の入学式も震災後の混乱期だったためか不安定さが大きく感じられた。被災地には、様々な支援物資が溢れるように届く。支援物資が長く続くと当たり前のように感じる生徒へ感謝をどのように教えるべきか教師も戸惑う。支援する側も現場の状態を把握し、適切な支援を行うように心がける必要を感じた。また、現地で活動する中で、一緒に泣いたり怒ったりと「人」が関わる大切さを実感した。本来会おうはずのない出会いは、遠く離れても大切にしていきたい。



## 実践2 震災・学校支援チーム（EARTH）員による被災地の支援活動

### 1. 派遣までの経緯

EARTH 派遣では、本部から派遣チーム編成の連絡が入り、派遣先の学校からの依頼内容や研修計画などが決まっていれば事前に届く。災害の状況や派遣時期に応じて内容は異なり、派遣先での活動も現場に入ってから必要に応じて変わっていく臨機応変な場合も多い。しかし、どんな場合でも、阪神・淡路大震災の経験や教訓を踏まえた心のケアの研修や意見交換を行い、被災地の教職員の現状に寄り添う交流となることをねらいとしている。今までの派遣の一部を紹介する。

【女川高等学校職員と EARTH 員】

### 2. 災害地域派遣での取組とチーム力

#### ◆東日本大震災に係る派遣(2012年7月31～8月4日)

EARTH 員 16 名で 4 つの班が編成され、スクールカウンセラー 1 名、事務局 3 名で東松島・女川・石巻の学校を訪問し教職員を対象に各校から要望のあった内容に沿って交流を行う。バスで移動中の合間や夕食時には、情報交流が欠かせなかった。宿泊先が女川町だったこともあり、女川高等学校の教諭が激励のため来訪。EARTH 員の励みにもなった。



#### ◆東日本大震災に係る派遣(2013年8月21日～8月23日)

派遣チーム編成は、阪神・淡路大震災を経験した EARTH 員 2 名、当時生徒だった EARTH 員 1 名、被災経験のない EARTH 員 1 名と私の 5 名だった。

石巻市立釜小学校では、職員研修へ参加だった。職員間でも災害当時の話をしていなかったため、最初に震災当時の学校の様子や対応が報告された。EARTH 員が各グループに入り「現在の子供達の状態」をテーマにワークを行った。「お茶でも飲みながら」と釜小学校の職員が言ったのをきっかけに「関西のお菓子を持ってきました。」と EARTH 員が菓子を出すと、雰囲気が一気にリラックス状態になった。グループワークでは子供の事・家庭の事・自分自身の事など様々な発言があった。避難者には、様々な支援が入るが学校の職員へは支援が入らない。「私たちの休憩室にあった冷蔵庫が使えなくなったから冷たい飲み物も飲めない。」こんな時に不謹慎だと思わずと我慢してきて言えなかった言葉だった。

女川町立女川中学校でも職員研修への参加で「生徒の抱える問題」をテーマにグループでディスカッションを行った。先生方の表情は厳しく目の前のお菓子にも手が伸びない。グループワークが進んでいくと、職員側にゆとりがないと生徒の変化に気が付かないという視点になると「私たちも大変忙しい。」との意見が出始めた。先生方は、災害後の子供達への対応について難しい研修を何度も何度も受けてきていた。子供達と接する時間を割き、遅くまで研修を行い、これ以上私たちは何を学んでいけないといけぬのか。そんな声が聞こえてきそうに思えた。それは、阪神・淡路大震災を経験していた EARTH 員の体験から終わりの見えない災害に対する教育現場の葛藤の話を知っていたので、女川中学校の職員研修で雰囲気を察することができた。研修の



後半に EARTH 員の講話を予定していたが、急遽、構成を変更。少しでも肩の力を抜いてホッとする時間を持ってもらおうとゲーム感覚で楽しんでもらえる研修に切り替えた。その後、お互いを労うペアーリラクゼーションを取り入れることにした。ゲームで子ども感覚に戻って歓喜の声をあげる姿とリラクゼーション中の笑顔は忘れられない。

◆熊本地震に係る派遣（2016年6月27日～7月1日）

益城町立広安小学校に単独で支援に入る。災害直後から EARTH 員が継続して支援に入っているために避難所運営と教育現場は協力体制ができていた。また災害後からの状況はグループメールにて前派遣 EARTH の報告を読んでいたのである程度の理解はしていた。広安小学校での校長先生より養護教諭の立場として子ども達のケアや先生方の手伝いをして頂きたいと依頼を受ける。3年生から依頼があり、学年集会で「あるくんのぼうし」を教材にリラクゼーションを実施する。また、5年生よりクラス単位で保健学習に心のケア実施の依頼を受ける。教室に入りにくい児童もいたために時間を見つけて、担任と打ち合わせを行っていた。その様子を見ていた自校の養護教諭が、あるクラスに「絆を取り戻すプログラムを行いたい」と相談を受ける。事務局や先発派遣の EARTH 員へ相談しながら、担任や養護教諭と準備や打ち合わせを行った。実施した授業の最後には、照れながらも「ふわふわ言葉」を書いている児童の姿が印象的だった。



◆熊本地震に係る派遣（2016年8月22日～8月26日）

3名で班を組み、御船町立御船小学校に派遣。それぞれが違う学年に入ったが、震災後に EARTH 員の支援が入っていないため、現場からの要望に応えることをねらいとして活動した。初日の2日間は休業日で児童の登校はなかった。職員作業に加わり避難所や支援物資で出た段ボールの分別や学習園の草引きなど一緒に汗をかいた。職員作業中の会話から当時の様子を聞くことができ、担任団との距離が縮まった気がした。

3. 課題及び今後の取組の方向

被災地では計画通りには行かないのが通常である。編成された班員で事前に連絡を取り、派遣先での移動の時間や宿泊先で意見交換し、派遣先の学校へ何ができるかを組み立てていく。また、派遣に入ってから現地にいる EARTH 員だけでなく通常勤務している EARTH 員からグループメールの報告に対しアドバイスが入るので、一人で抱えこむことはない。また、派遣先の学校へ EARTH 員が継続して支援に入る場合は、バトンリレーのように情報を共有し、ぶれないことが派遣先での信頼につながることを忘れてはいけない。

また、EARTH 員は派遣として学校現場に入るのだが、被災地に対する思いが強すぎると現場の職員の立場を奪い、被災校の自立を遅らすことにもなり兼ねない。災害現場は、個々に違ってくるので、これからも研鑽を積みながら後輩 EARTH 員へ繋げていく役割も果たさなければならないと感じる。